

海外医局員報告

ニューヨークの記憶を免疫する 研究生生活

藤 枝 雄一郎（日本大学平成 16 年卒）

私はこのたび、渥美教授ならびに小池名誉教授の推薦を受け、アメリカ、ニューヨーク州にあります、The Feinstein institute for medical research、The center for autoimmune and musculoskeletal disease に 2014 年 7 月より研究留学することになりました。

まず留学先について、どこ？と聞かれることが多いため説明します。

私の留学先は、North Shore Long Island Jewish (LIJ) という組織の中にある研究所になります。North Shore LIJ 研究所という名前を出せばわかる方もいるのではないのでしょうか？糖尿病グループの渥美敏也先生が留学されていた研究所です。

場所はニューヨーク州ですが、タイムズスクエアやセントラルパークでおなじみのマンハッタンではなく、ロングアイランドという島の中にあります。島ですが、マンハッタンまで電車で 40 分、車で 60 分です。また、自然が豊かで、釣り、海水浴、ワイナリーなどマンハッタンの住人が観光にくる場所です。

研究所の話に戻ります。

所属している部署は、免疫の研究室で、教授は Betty Diamond です（写真参照）。

Betty 先生は、B 細胞と自己抗体の研究がメインテーマで、最近では Neuro Psychiatric SLE (NPSLE) のモデルマウスを用いた auto reactive brain antibody の研究が盛んです。日頃から渥美教授がグローバル化という言葉が使われていますが、今私のいる研究室もアメリカ人は少数で、中国、インド、韓国、オランダ、オーストリア、イスラエル、チリと多国籍です。それぞれ出身国には多々問題があるかもしれませんが、いままさに研究と



Betty 先生主催のラボパーティーにて。

いう国境のない世界で、平等にグローバルな視点で、お互い刺激し合い生活しています。私の研究テーマは、NPSLE のモデルマウスが失う記憶力のメカニズムを immunology の側面から解明することです。タイトルにあるような記憶を免疫する研究ではありませんが、炎症や自己抗体が海馬にどのように関与しているかをノックアウトマウスを用いて調べています。

そしてこの研究室に留学が決まった経緯についてですが。

大学院を卒業する頃、渥美教授に今後についてどうしたいか聞かれ、迷わず基礎に留学したいと答えました。もっと一流の研究に触れてみたい。もっと自分を成長させたいという気持ちがあったからです。そして以前から興味があった NPSLE のモデルマウスをつくった研究室があること、教授の名前が Betty Diamond であると知りました。渥美先生に Betty 先生のラボに興味があるとメールした、まさにそのとき、渥美先生が国際学会で Betty 先生と同じセッションで講演するという偶然があり、渥美先生が直接 Betty 先生に交渉していただき快い返事をいただきました。また interview に行く際には、ボストンにいた片岡浩先生、吉田修也先生にたくさんのアドバイスをいただき無事 interview を終えることができました。

そうした偶然と人と人のつながりから私の留学は決まりました。

日常生活についてですが。夕方家に帰ると、サマータイムのお陰でまだ外は明るく、息子とキャッチボールができます。娘とお風呂にも入れます。子供達の宿題を一緒に問いたりもできます。ときどき貯金残高が減るのをみても、この先暮らして行けるのか不安になります。でも、そんなことよりも、新しい発見を夢見ながら、家族との時間を過ごすことこそが、留学の一番の意義なのではないかと感じています。

私の後輩にむけて、留学はなぜするのか？と伝えるのであれば、今はそのように伝えようと思います。まだまだ留学生活ははじまったばかりです。ひょっとすると明日何かに絶望して日本に帰りたいと思うかもしれません。でもそれはきっとないだろうと確信しています。家族を大事にしながら、体を大事にしながら研究生活を続けたいと思います。

入局したときに小池先生に言われたとても印象に残っている言葉があります。

「藤枝君。病気は、「なおる薬」ができればそこで研究は終わるんだよ。結核だってそう。今後リウマチもそうなるよ。いまだに病態はわからないし、研究も続くだろうけど。なおる薬ができることはとてもインパクトがある」

臨床において、精神神経、痛みに対してなにもできなかった歯痒さが、今の私のモチベーションになっています。このニューヨー

クでの記憶を免疫し「なおる薬」の発見につながるように夢をみています。

最後にこのような大変貴重な経験の第一歩を踏み出せたことに、渥美教授、小池名誉教授ならびに今まで出会ったすべての人に感謝する次第です。



吉田修也先生と 全米オープンの決勝 錦織選手を応援しました！